論文審査の要旨

報告番号	修第 1324 号	氏名	米谷　将吾
論文審査担当者	主査　宮川　哲夫 副査　加賀谷　善教 副査　安部　聡子		

（論文審査の要旨）

「人工股関節全置換術後患者の回復期リハビリテーション病棟入院時のエネルギー充足率が身体機能に及ぼす影響」についての論文である。本研究は、急性期病院で変形性股関節症による片側人工股関節置換手術を施行し、回復期リハビリテーション病院へ転院した患者 17 例を対象に、エネルギー消費量、エネルギー摂取量を測定し、摂取量÷消費量=エネルギー充足率を求め、アルブミン値、BMI、FIM、院内自立度、入院日数、股関節外転筋力、膝関節伸筋力、握力、10m歩行時間、TUG との関連性について充足群と非充足群で検討した。以下のことが明らかとなり、今後のエネルギー充足率の標準化やリハビリテーションの在り方に関する示唆が得られた。

1）非充足群において急性期病院入院日数は有意に長く、回復期病棟入院日数は有意に短い結果となった。2）非充足群において基礎代謝量と消費エネルギー、退院時術側股関節外転筋力が有意に高値を示したが、その他項目では 2 群間に有意差を認めなかった。

3）エネルギーと運動機能測定項目では、エネルギー消費量が高齢エネルギー非充足群で有意に大きかった。4）エネルギーと運動機能測定項目では、2 群間に有意差を認めなかった。5）エネルギー充足群(出納プラス群)、非充足群(出納マイナス群)の 2 群間において在院日数に有意差を認めなかった。

先行研究との比較では、エネルギー出納がプラスであるほど、術後の合併症が少なく、在院日数が短くなり、転帰先に影響することが報告されているが、本研究では差を認めていない。その要因として、先行研究との対象疾患・年齢の差異、エネルギー充足率の測定時期・期間、病院での自立度の３つが考えられる。つまり在院日数が短く年齢が比較的若い患者においては、エネルギー充足率が在院日数に直接的な影響を与えないことが示唆された。過去の報告では、本論文のような詳細な検討はなされていない。また、研究目的、方法及び得られた結果の分析も明確に示されており、先行研究に関する検討も適切に行われている。今後の臨床に応用できる可能性は非常に高いものと思われる。したがって、本論文は修士（保健医療学）の学位に相当するものであると判定する。